

はじめに

Set out for a resurrection!

東洋大学 国際哲学研究センター長
村上 勝三

東北地方を襲った大震災、東京電力福島第一発電所の過酷事故のおよそ三ヶ月半後、2011年7月1日に5年間の期限として、このセンターは創設されました。文科省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択されたからです。「研究プロジェクト名」は「国際哲学研究センターの形成—多元化した地球社会における新たな哲学の構築」でした。そして2016年3月31日という期限を迎えます。社会的に重要な活動の「戦略的研究基盤形成」という目的は成し遂げられたと考えております。

第1ユニットは国際井上円了学会を設立し、学術研究推進母体としての機能を果たしています。この活動は来年度から東洋大学の「井上円了研究センター」に引き継がれることになりました。この点で「戦略的研究基盤形成」を成し遂げ、この場合には次の機関も明確になり引き継ぎが現実化されることになりました。そのほかの活動でも所期の計画を達成しました。国際哲学研究センターの活動を大きく括りますと、第1ユニットの場合には、日本哲学の成立過程の解明、第2ユニットは世界哲学の方法論研究、第3ユニットは宗教と文化の共生、つまりは、日々生きて行くありさまの上に成り立つ共生、誰でもが敬意を払い許し合いながら生活して行く様式の解明です。この三つの活動が一つになることもわかってきました。明確な方法を開発しながら、その共有可能性を基礎に、自分たち自身の伝統と文化的土壌の固有性を人類的規模のなかで明らかにし、人類がそれぞれの住まいする地域においてそれぞれが培ってきたそれぞれの固有性に敬意を払いつつ、或る場合には許しを請いつつ、共に生きて行くプラットフォームになる考え方を見いだして行く。これが未来に向けて私たちの提起すべきことです。

日本哲学形成史の解明は自らの固有性を人類文化のなかでどのように明らかにして行くのかという活動の具体的遂行です。そして人類規模に研究を広げるためには方法の共有可能性を測るとともに、現実的、実践的な研究方法を確立して行かねばなりません。そのうちの明確になった実践的手段がWEB国際会議であり、クロスセクションの技法であり、各専攻領域における一般的知識をもった専門的翻訳者の養成です。これらを、生きているありさまから遊離することなく、生活のさまと一体化して理論へともたすためには、敬意と許しのなかで人々がどのように生きてきて、さまざまな困難、対立、葛藤をどのように克服してきたのか、そこから実地に多くを学ぶ必要があります。こうして国際哲学研究センターの基盤ができました。しかしながら、文科省はこの事業形態を終えることにしました。私たちの構築した事業基盤は次の段階への飛躍を前にしています。外的条件に応じようとしたのではなく、私たち自身が自らの意志により掲げ実現したこの基盤が、現実の研究機関として実現するのかどうか、そのことは外的条件に依存せざるをえません。

私たちの5年間の活動はホームページ、動画、ニューズレター、5冊の年報（『国際哲学研究』）、8冊の年報別冊、『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』（教育評論社）、『ポストフクシマの哲学 原発のない世界のために』（明石書店）、『越境する哲学—体系と方法を求めて』（春風社）、『宗教の壁を乗り越える—多文化共生社会への思想的基盤』（ノンブル社）に集約されております。しかし、それよりも確かで稔りの多いのは5年間で築き上げた国内と海外の膨大な研究者との絆です。

以上の成果が得られたことを私たちは心から誇りに思います。優れた研究員と客員研究員に支えられながらこの事業は遂行されました。そしてこの遂行を支えた事務局、すなわち研究助手、リサーチアシスタント、アルバイトなどの、実は既にりっぱな研究者であったり、これから研究者になる人たちの実務的な活動に支えられ、賦活されてきました。私たちのもっとも誇るところを一つだけ挙げよと求められるならば、私は何の躊躇いもなく「事務局」を挙げることでしょう。また、本センターは東洋大学の研究推進課の強力な支援にも支えられてきました。心から感謝の意を表します。

2016年1月23日